「男、突っ走る！」

第101回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内	雅也	（24）	『オフィスツリーイン』代表
植野	雪奈	（24）	元名古屋芸術専門学校学生
船倉	篤志	（24）	元名古屋芸術専門学校学生
奥村	裕司	（25）	元名古屋芸術専門学校学生
安永	和也	（24）	元名古屋芸術専門学校学生
国枝	佐代子	（59）	『スリジェネ』総合プロデューサー
国枝	茉奈	（27）	佐代子の娘
田所	俊子	（63）	市民映画プロデューサー
住吉	真由美	（42）	ダンス講師
山森	直海	（19）	『スリジェネ』メンバー
大坂	美央	（17）	『スリジェネ』メンバー
阿川	緑	（30）	『スリジェネ』メンバー
麦沢	愛花	（20）	『スリジェネ』メンバー
坂本	寿梨	（20）	『スリジェネ』メンバー
弘田	洸	（23）	ミュージカル出演者
鈴岡	ゆりえ	（19）	ミュージカル出演者
山川	裕作	（20）	ミュージカル出演者
北	まひる	（22）	ミュージカル出演者
月島	藍那	（22）	ミュージカル出演者
大森	泰明	（58）	ミュージカル出演者
加原	美穂子	（35）	ミュージカル出演者
加原	千世	（13）	ミュージカル出演者
林	亜里沙	（12）	ミュージカル出演者
赤澤	隆太	（11）	ミュージカル出演者
辻松	翔	（11）	ミュージカル出演者

1　居酒屋（夜）

打ち上げをしている雅也、直海、美央、緑、愛花、寿梨、ゆりえ、裕作、まひる、藍那、泰明、その他キャストたち。

寿梨「うっちーは、本当に大変だったね。いろんなところで板挟みにあってね」

雅也「まあそれも、今日でおしまいよ。そりゃいろいろ大変だったけど、これも一つの経験だと思ってさ」

愛花「ある意味では、うっちーは鋼のメンタルだよね」

雅也「そんなわけないでしょ。落ち込んだり、泣いたことだってあるんだから」

緑「でもさ、うっちーも『スリジェネ』辞めるんだから、もうサンドバックになることもないわけだし」

雅也「そうですね。本当は全てやり終えて、今日でおしまいって言いたいところなんですけど、明日は明日で、延期になったハロウィンライブがありますから」

直海「私、出たくないなぁ」
ゆりえ「どうして？」
直海「だって、本番が終わったのに、出演する意味ある？」
美央「まあ、それは言えてるかもね」
雅也「気持ちは分かるけど、今更脚本とか演出を変更するわけにはいかないでしょ。明日が本番なんだから」
直海「分かってるよ……」
雅也「言い方悪いけど、明日さえ終われば、みんなはもう『スリジェネ』を卒業するんだから」
裕作「あの台風さえ、なければね」
藍那「明日、私見に行くよ」
まひる「私も」
直海「良いよ、来なくて……」
雅也「何もそんな言い方しなくたって。せっかくまひるも藍那も来てくれるって言ってくれてるんだから」
直海「……」

藍那「楽しみにしてますからね」
雅也「ありがとう、藍那」
寿梨「何か、最近うっちー、藍那さんと仲良いじゃん」
雅也「そりゃね、俺たちセリフはなくても、役柄上はカップル役をやらせてもらったわけですから」
愛花「うっちー、基本藍那さんといると耳が赤くなるよね」
まひる「照れたんですか？」
雅也「（ムッとして）考えてもみなさいよ。ろくに恋愛経験をしてない俺みたいな男が、モデルを仕事にしてる藍那とカップル役やったんだよ。しかも腕組んで登場してさ」
藍那「確かに、いつも何か緊張してましたよね」
雅也「藍那、それだけは言わないで」
泰明「うっちーも満更じゃなかったんでしょ」
雅也「やっさん、これ以上火に油を注がないでください」

泰明「はいはい」

雅也「（直海に）とにかく、明日の本番頑張ろう。終わったら、愚痴はいくらでも聞いてあげるから。だてに、『スリジェネ』のクレーム処理係やってないから」

直海「はーい」

2　道（翌日）

車を運転している雅也。

N「翌日、午前中の仕事の予定を終えた僕は、そのまま住吉先生のダンススタジオで行われる最終リハーサルに向かいました」

3　住吉ダンススタジオ

美穂子、千世、その他生徒たちがBGMに合わせてダンスを披露している――その様子を見ている住吉。

雅也、佐代子、茉奈、田所、直海、洸が端でスタンバイをしている。

4　中央交流センター・エントランス

N「そして、ハロウィンライブの本番がやってきました」

特設ステージが組まれている――背景のデジタルサイネージにもハロウィンの映像が映されている。

椅子が並べられており、既に客が座っている――立見で待機している美央、寿梨、ゆりえ、裕作、まひる、藍那、亜里沙、翔。

下手のMC席に登場してくるハロウィンのカボチャの仮装をした佐代子。

佐代子「ハッピーハロウィン！　今日は中央交流センターハロウィンライブにご来場いただきありがとうございます。間もなくハロウィンライブ開幕です。どうぞお楽しみに！」

ステージ裏でスタンバイをしている雅也、茉奈、田所、直海、洸、美穂子、千世――手伝っている住吉。

住吉「みんな、頑張るんだよ」
一同「（小声で）はい」
千世「うっちー、頑張ってよ」
雅也「分かってるよ。今回、演技よりも歌が
心配で」
美穂子「大丈夫。楽しんでいきましょう」
雅也「はい」
茉奈「楽しむことが一番ですもんね」
洸「そうそう。歌でも演技でも、楽しい姿で
やってればお客様にもそれは伝わります」
雅也「そうだね」
直海「……」

×　×　×

美穂子、千世、その他生徒たちがキレ
キレのダンスを披露している。
ダンスが終わり、決めポーズをすると、
観客席の一同が拍手をする。
美穂子たちが上手からはけていくと、
カラスの格好をした雅也が一人、下手
から入ってくる。

雅也「カーッ、カーッ」

観客席から笑いが起こる。

×　×　×

ステージ裏の住吉たち。

住吉「やっぱ、うっちー持ってるな」

洸「あれは、一つの才能ですよ」

茉奈「さすがうっちー」

×　×　×

雅也「カーッ、カーッ」

と、下手から魔女の格好をした田所が入ってくる。

田所「おい、うるさい」

雅也「カーッ」

田所「今日は一体どうなってるんだい。どいつもこいつも、キラキラした衣装なんぞ着おって」

雅也「カーッ（と耳打ちをする）」

田所「何、ハロウィンだと。おのれ、そんなものせずとも、わらわの歌声を聞いて跪けば良いのじゃ」

と、ＢＧＭが流れる。

雅也「カーッ！（と下手へ去っていく）」

×　　×　　×

雅也がステージ裏に戻ってくる――迎える洸、直海、住吉たち。

洸「さすがうっちー、受けてましたね」

雅也「楽しむ気持ちで演じたからね。でも、まだ歌が残ってるから」

×　　×　　×

ステージでバラードを熱唱している田所。

×　　×　　×

ステージ裏でヒョウ柄の衣装に早着替えをしている雅也――手伝っている妖精の格好をした茉奈。

茉奈「よし、オッケーだよ。うっちー」

千世、雅也にメイクをする。

千世「完璧だよ、うっちー。獣になった」

雅也「ありがとう」

×　　×　　×

ステージでデュエット曲を披露している直海と洸。
曲が終わると、下手から雅也と茉奈が入ってくる。
茉奈「どうしたんだい？」
雅也「分かった。ハロウィンパーティーに、どうやって参加したら良いのか分かんないだな」
直海「私たちでも、ハロウィンパーティーに参加できるのかな？」
洸「このまま帰ろうかなと思って」
雅也「何言ってるんだよ。パーティーに参加する条件は、ただ一つ。楽しい気持ちだよ」
雅也・茉奈「ねぇ」
茉奈「じゃあ、私たちも一曲歌っちゃおうか」
雅也「歌っちゃおう、歌っちゃおう」
と、ＢＧＭが流れる――雅也と茉奈がノリ良く曲を歌い始める。
×　×　×
観客席で見ている美央、寿梨、ゆりえ、

裕作、まひる、藍那、亜里沙、翔。

×　　×　　×

カーテンコールになり、美穂子、千世、その他生徒たちが出てくる。その後続くように、田所と茉奈、洸、そして雅也と直海がセンターへ出てくる。

ＭＣ席に出てくる佐代子。

佐代子「本日はハロウィンライブにご来場いただき、ありがとうございました。最後は皆さんと一緒にエンディングを迎えたいと思います。それでは、うっちー、ナオお願いします」

雅也・直海「はーい」

雅也「それでは今からエンディングとして、僕たちのメインテーマ『スリジェネ』をお届けします」

直海「ご来場の皆さんは、ぜひ一緒に手拍子をお願いします」

雅也「それでは……」

と、直海と顔を合わせると、

雅也・直海「ミュージック、スタート！」
と、ＢＧＭが流れる――美央たち観客が手拍子をする。
雅也たち出演者一同がダンスをしながら歌う――曲のラストで、一斉に決めポーズ。
拍手をする観客たち。
雅也「本日は、ありがとうございました！」
一同「ありがとうございました！」
と、深々と礼をする。
×　×　×
見送りをしている雅也、直海、洸、茉奈、美穂子、千世――美央、寿梨、ゆりえ、裕作、まひる、藍那、亜里沙、翔がやってくる。
美央「みんなお疲れ」
洸「ありがとう、来てくれて」
寿梨「みんな、楽しそうだったね」
直海「まあ、最後はちゃんと楽しもうと思ってね」

美穂子「本当に最後なんだね」
千世「寂しくなるね」
直海「まあ、みんな打ち上げで会えるし」
まひる「（雅也に）うっちー、お疲れさまでした」
藍那「カラス、面白かった」
雅也「ありがとう。あそこでウケれば、もう満足だったよ」
亜里沙「お疲れ、うっちー。見ててすごく楽しかった」
雅也「ありがと、アリサ」
翔「りゅーたも来れたら良かったのにな」
雅也「ああ、りゅーた来られなかったのか」
亜里沙「でもね、うっちーにビデオメッセージ預かってるの。（とスマホを見せる）」

×　×　×

カメラ目線でビデオメッセージを話す隆太。
隆太「うっちー。今日は行けなくてごめんなさい。うっちーが元気に本番ができるよう

に祈ってます。バイバイ」

×　　×　　×

雅也「嬉しいね。俺も帰ったら、ビデオメッセージ録って、りゅーたに送ろう」

亜里沙「絶対喜ぶよ、りゅーた」

雅也「うん」

美央「（裕作に）そろそろ帰ろうか」

裕作「だな。途中で飯食ってこう」

美央「うん」

雅也「二人、一緒に来たんだ」

美央「実はさ……」

雅也「……」

裕作「俺たち、付き合ってるんです」

一同「えーッ！」

5　木内家・雅也の部屋

パソコンで仕事をしている雅也。

N「衝撃的なラストを迎えたハロウィンライブも無事に終わり、僕にとって、『スリジェネ』の最後のステージとなったと、この

時は思っていました。ミュージカルやライブが終わってからの一ヶ月は、ゆっくりとしたものでした。もう本番を迎えることがなく、僕は溜まっていた仕事に精を出す日々が続いていました」

6　滋賀・琵琶湖・グランピング会場付近の海（一ヶ月後）

N「そして十一月末には、ゆきちゃんやあつぽんが企画してくれたグランピングのために、琵琶湖を訪れていました」

写真を撮り合ったり、かけっこなどをして遊んでいる雅也、雪奈、篤志、裕司、和也、その他友人たち。

N「初の琵琶湖でしたが、やはりお互いに気心の知れている友人たちとの旅は楽しいものでした。このメンバーで飲みに行くことはこれまで何度もありましたが、遠出の旅行は初めて。ふと、海外研修でアメリカに行ったときのことを思い出しました」

7　同・同・工房

雅也、雪奈、篤志がリースを作っている。

N「冬を間近に控えた琵琶湖は寒かったでしたが、それでもリースを作ったり、夜のテントの中でみんなとワイワイ談笑する時間は楽しいものでした」

8　同・同・テントの中

雅也、雪奈、篤志、裕司、和也、その他友人たちが集まっている。

雅也「グランピングなんて始めただけど、こういう形のキャンプも良いもんだね」

雪奈「遠出の旅行って、思えば初めてだしね」

裕司「確かに、いつも名古屋で飲み会して終わってたもんな」

和也「グランピングだったら、終電とか時間気にしなくても飲めるしな」

篤志「やっすーの頭は飲むだけか」

雅也「まあ良いでしょ、こういう時なんだもの」
裕司「そういえばさ、俺、一つうっちーに聞きたいあるんだけど」
雅也「何？」
裕司「先月さ、ミュージカルの本番終わったって、写真ＳＮＳに上げてたでしょ」
雅也「あげた」
篤志「ああ！」
雅也「何？」
篤志「あの女の子のことか」
裕司「そうそう。あつぽんも気づいた？」
篤志「気づいた」
裕司「だって、よく見たら、うっちー、女の子と腕組んでるんだよ。しかも、めっちゃキレイな女の人と」
雅也「そりゃキレイだよ。モデルさんなんだから」
一同「モデルッ！？」
雪奈「どういう関係なの？」

篤志「レンタル彼女か？」
雅也「おい」
雪奈「さすがにそれはないでしょ」
雅也「あれは、カップル役をやったから」
篤志「でも、だからって集合写真で腕組む
か？」
雅也「まあ、写真撮るとき、いきなり腕をサ
ッと入れてきたから、まあ動揺はするよね」
雪奈「付き合うの？」
雅也「付き合うわけないでしょ。そういう関
係じゃないんだから」
雪奈「何だ、つまんないの」
雅也「うるさい」
N「久しぶりに会うメンツとは積もりに積も
る話がたくさんあり、この会話は深夜まで
続いたのでした……」

9　びわ湖バレイ・ロープウェイ（翌日）
ロープウェイに乗っている雅也、雪奈、篤志、
裕司、和也、友人たち。

N「翌日は、ロープウェイに乗ってびわ湖テラスまで向かいました」

10　同・テラス

一面に広がる琵琶湖の景色――それを眺めている雅也、雪奈、篤志、裕司、和也、友人たち。

雅也「キレイな景色だね」

雪奈「ホント、来て良かった」

篤志「グランピング企画して正解だったわ」

裕司「（写真を撮って）この写真、しばらくＬＩＮＥのトップ画にしよう」

和也「嫌なこと全部忘れられそうだわ」

雅也「俺も。この一年半近く、怒涛の生活だったからね」

雪奈「舞台ばっかりだったもんね」

雅也「まあ、それも何とか終わって、今は本来の仕事に専念してるけどさ」

雪奈「私も、仕事で忙しくてさ。何とかケリのつくタイミングに合わせたら、これぐら

いの時期になっちゃって」
雅也「ちょうど良かったよ。俺も、先月末までは舞台本番で、とても呑気にグランピングとか旅行する余裕なんてなかったから」
裕司「アメリカ研修の時も、楽しかったよな。うっちーとはさ、自由行動の日に、近くのショッピングセンター行ってさ」
雅也「行ったね。卒業はしちゃったけどさ、やっぱり俺たちには、こういう時間もたまには作らないとね」
篤志「確かに、学生時代も良かったけど、こうやって卒業してからでも会える関係性が一番良いわ」
雪奈「よし、みんなで写真撮ろう」
雅也「オッケー」
雪奈、スマホのカメラを起動する――琵琶湖を背景に、カメラに顔が映るように集まる雅也たち。
雪奈「撮るよ、はいチーズ」
と、シャッターボタンを押す。

11　木内家・雅也の部屋（数日後）

雅也の作ったリースが、ドアに飾られている。

コルクボードに、びわ湖テラスで撮った写真が飾られている。

12　同・居間

雅也が台所でケーキをラップに包んでいる。

N「そして、季節は十二月に入り、世間ではクリスマスムードに。この日は、『神様が願うまで』の打ち上げが行われることになり、僕は久しぶりにお菓子作りをしました」

つづく